

日常的な教育改善のための組織的な取り組み

Systematic Efforts for Daily Educational Improvement

奥田 雅信 (Masanobu OKUDA)

CELL 教育研究所 (CELL Research Center for Educational Development)

同一科目を複数の教員で担当し、多クラス展開する場合、科目目標と科目評価を共有し、日々目標を意識しながら授業評価・改善を行うことによって、組織的に教育力を高めることができる。本稿では、本学の初年次必修科目における教育改善のための組織的な取り組みを報告する。教育目標の組織的な形成、授業計画 (内容・方法)・成績評価基準の統一化など、一定の共通性のもと、授業日、学期といった単位で適時的な授業改善活動を行うことの必要性を示す。

キーワード：目標と評価，授業改善，統一性，共通性，日常的 FD

1. はじめに

大学はユニバーサル化の時代を本格的に迎え、多様な学生を受け入れ、教育の質を維持し向上させるシステム作りがこれまでになく重要になっている。

本稿では、同一科目を複数教員の担当で多クラス展開する場合の、組織的で日常的な授業改善活動の一例として、本学の初年次必修科目の取り組みを報告する。

FD活動が教育改善の中に埋め込まれた日常的なものになるには、さまざまな教員組織レベルにおいて、一定の共通性のもとで重層的な取り組みを展開すること必要であることを示したい。

2. 日常的な FD

2007年4月に大学設置基準が改正されたが^①、その要点として以下の3つに注目したい。

(1) 教育研究上の目的の明確化

「大学は、学部、学科又は課程ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則等に定め、公表するものとする。(第2条の2関係)」

(2) 成績評価基準等の明示等

「大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとする。また、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。(第25条の2関係)」

(3) 教育内容等の改善のための組織的研修等

「大学は、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。(第25条の3関係)」

これら3点をまとめると、(1)では教育目標の組織的な形成、(2)では授業計画 (内容・方法) の明示、

および成績評価基準の明示が求められており、(3)はFD (Faculty Development) の義務づけである。ここでいわれているFDは、教員個人の授業法や授業改善にかかわっているのではなく、組織的な授業改善にかかわっている。

本稿では、「FDを通じて大学教育を啓蒙し教育改善活動に向かわせるという発想ではなく、教育改善に伴って行われている日常的なFD」^②という視点から、本学の初年次必修科目における組織的な教育評価・教育改善のための活動を、「教育改善の中に埋め込まれたFD (FD embedded in educational improvement)」^③ととらえ、次章以降で報告する。

3. 本学の初年次必修科目での実践

本学の初年次必修科目は、約800名の1年生を対象に、同一科目を複数教員の担当で多クラス展開している。以下では、科目内および科目間で連携しながら実践している諸活動について述べる。

3.1. 教育目標の組織的形成

本学は、ユニバーサルアクセス時代の大学として、複合的領域を幅広く学習できるリベラルアーツ型教育の中で、学生が「自分で創る専門性」を習得するための支援を行い、また、学生が新たな時代を生き抜くための「社会人基礎力」を身につけるための支援を行うことを使命としている。

本学が目指すリベラルアーツ型教育の基本は「自己教育」にある。すなわち、学生が自ら学習する姿勢を学び、またその結果としての自己成長に気づくことで自律的な活動の必要性を自覚することである。

学生を「自己教育」へ導くために、リベラルアーツコア教育の入口となる初年次教育での活動は重要であるが、本学では、全学生を対象とした必修科目として、学習の基礎力、自己管理力の養成を目標とする「日本語表現」「英語表現」「情報活用」、および対人関係での適応、大学生活への適応などを目標と

する「フレッシュマンセミナー」の4科目（半期7単位、年間14単位）が設定されている。これら4科目は、相互に連携し補完し合う形で、大学における学習スキルと大学生活への円滑な適応を目標として掲げている。

3.2. 授業計画および成績評価基準の明示と統一化

3.2.1 授業計画

学期全体の授業展開の中で、シラバスと総括的評価（学期末試験など）は始めと終わりに位置づけられるものであり、科目の授業計画全体が妥当であるかは別問題である。したがって、毎回の授業がうまくいっているのかどうかの評価できる体制をとらねばならない。

全ての学生がシラバスに示された学期目標を達成するためには、日々実行される授業こそが教育活動の中核となる。その意味で、毎回の授業で何を教えながら学期目標を実現するのかを明らかにする必要がある。そこで、必修4科目では、科目コーディネーターが毎回の授業目標や内容を詳細に記した授業計画書を作成し、担当教員に配布している。これによって、授業改善課題をより具体的なものにすることもできる。

シラバス、毎回の授業計画書を科目コーディネーターが作成する意味として、次のことがある。必修4科目では、同一科目に複数の担当教員が携わるが、担当教員が個々に計画した授業では、それが成功したのか失敗したのかが不透明である。また、同一科目であるにもかかわらず、個々の教員によって異なる授業があることは、科目としての目標がないということに等しい。このため、同一科目を複数の教員が担当する必修4科目では、同一のシラバス、総括的評価、授業計画書に基づく授業を展開している。

シラバス、授業計画書を作成する過程で、必修4科目のコーディネーター間で科目相互の連携性を考慮に入れた授業計画も立てられている。例えば、ある科目で学んだことをもとにして、別の科目でそれを応用して学ぶといった授業内容も適時的に盛り込まれる。科目内の統一性・共通性のためだけでなく、科目相互の関係を意識しながら授業を展開するためにも、授業計画の共有化は重要となる。

授業計画は教員間のみならず、学生に対しても、毎回の授業で明示される。

3.2.2 成績評価基準

学期末の総括的評価については、その方法・内容を学期目標とともに提示している。学期末の総括的評価によって学期目標の達成度が問われるという意味では、シラバスでの目標提示と同時に、目標評価の方法、目標達成をはかる内容を提示することは重要である。

だが、学期末の総括的評価は全ての授業が終了し

てから行われるものであり、これだけでは学生が学期目標の達成に向かってどの程度近づいているのかの情報を得られず、また、その情報を基にして日々の授業を評価し改善することにつなげていくことができない。

そこで、必修4科目では、毎回の授業目標を明確化するとともに、全学生に対して統一課題を用意している。課題の採点は学習支援センターの採点専門スタッフによって統一の基準で行われている。課題の提出日、点数、出来具合に関するデータは、全担当教員がいつでも把握できるようになっている。このデータを日々追っていくことで、学期末の目標達成に向かって、次回の授業で何をすべきかを、科目、教員、クラスといった単位で判断することが可能となる。科目単位では、科目コーディネーターが担当教員にどのような指示をするのかを判断し、担当教員は自分のクラスの学生に対してどんな指示をすればいいのか（何を再学習させればいいのか）を判断する。

日々の授業目標の到達度を評価する統一課題によって、成績評価を厳密に行うことができる体制が整うだけでなく、授業を改善するための具体的活動を科目単位で行うのか、教員単位で行うのかといった授業管理がしやすくなったと言える。以下では、この点に関して、さらに詳細に見ていくことにしたい。

3.3. 教育支援のためのシステム

日常的な教育活動を組織化し、厳密な成績評価を行うためには、学期末の総括的評価および成績評価判定に至るまでの授業過程の情報をできるだけリアルタイムに把握する体制をとる必要がある。

そのために、必修科目では、「スタンプ制」を導入し、出席状況と課題達成状況の2つの指標を、学生に対する日常的な指導と、日々の授業評価・改善活動において活用している。授業への出席状況、課題達成状況はそれぞれ「○」「×」という「スタンプ」を用いて、本学が独自開発した携帯電話対応LMS「確認くん」に表示される。これらのスタンプ情報が、学生にとっては日々の学習状況の確認になり、教員にとっては教育上のデータとして把握できるようになっているのである。

出欠スタンプの推移は、クラスの状況が良いものであるのかどうかを知るための資料となる。例えば、他の科目は出席しているにもかかわらず、ある科目だけ欠席している学生がいれば、それは危険な兆候でもあり、その理由がどこにあるのかを探らなければならない。一方で、どの科目も欠席している学生については、長期欠席、退学予備軍へとつながる可能性を示しており、授業担当者が対応できる範疇を超えている。その場合、学内関連部署との連携のもと個別面談を行うなど、授業外での対応が必要とな

る。

課題スタンプの推移からは、毎回の授業目標が達成できているのかがわかる。目標達成・未達成を示す課題スタンプの推移を追っていけば、目標達成に向けてどんな指導を学生にすればよいのかについての具体的な資料とすることができる。課題不合格数（「不」スタンプ）、未提出数（「×」スタンプ）の残数および新たな発生数が減っている学生については、授業内外で適切な処置が行われていることがわかる。残数は減っていても、新たに発生し続ける学生については、授業復帰できていないことを意味する。その場合、授業時間内での教員からの指導だけでなく、授業時間外でのチューターからの指導も含めて、その学生を授業復帰させるための適切な指導を早期に行っていく。

スタンプの推移を追っていく作業は、どこまでが担当教員の仕事で、どこからが組織的に取り組む必要があるのかということの線引きを行うことでもある。

3.4. 適時的な活動

日々の授業を教育活動の中核ととらえるかぎり、授業評価・授業改善は、時間的なサイクルに相關する活動となる。つまり、日常的な「教育改善の中に埋め込まれたFD」^④では、年度、学期のみならず週、授業日といった単位で、授業内容の実態に合わせて適時的に評価、改善を行うことを原則とするマネジメントが重要となる。必修4科目では、本稿で述べたような授業評価・授業改善活動をFDとして有効に機能させるために、科目コーディネーターがマネジメントの役割を担っている。

以下では、年度、学期、授業日といった単位毎に取り組みを見ていきたい。

3.4.1 年度初め

新年度の授業開始前に、必修4科目担当教員向けの説明会を実施している。初年次必修科目全体の目標や教育システム（ターム制、スタンプ制など）の周知のほか、各科目の趣旨や授業方法、使用教材などの説明を行っている。

必修4科目が緊密に連携しながら授業運営を行っているため、教員間での共通理解が4科目全体の達成度を左右することから、カリキュラムの理解に向けて重要な位置付けとなっている。

3.4.2 学期末

各学期終了後に、その学期を総括する授業評価を担当者全員で行うとともに、次学期に向けた課題を抽出する。同時に、次年度に向けた改善点についても議論する。学生による授業評価アンケート結果も共有し、組織的な教育力の向上に活かす。

3.4.3 ターム末

本学の初年次必修科目のカリキュラムでは1学期3ターム制をとっており、特にターム末が重要な位置付けとなる。

1学期を学習内容のまとまりによって3つに分けるターム制をとることで、学期全体の計画に比べて短い学習スパンであるため、計画の修正・改善が行いやすくなった。また、脱落可能性のある学生の早期復帰体制をとることが可能となった。ターム制では、ターム毎の習得状況に基づき、各ターム末（5週目）に2つの指導形態をとっている。すなわち、習得が十分でない学生には「再クラス」（補充学習）で対応し、十分習得し、さらに深く、広く学びたいという意欲ある学生には「特別クラス」（発展学習）で対応するというものである。

本学の初年次必修科目は複数の担当教員による多クラス展開のため、ターム末の再クラス、特別クラスの配置を通常の時間割の中で設定できる。例えば、月・水・木・金の各曜日、1,2時限に6クラスずつ開講されている「英語表現」では、第1週から第4週までの再クラス（各1クラス）と特別クラス（2クラス）を各曜日・時限に開講することが基本となる。

科目コーディネーターは、ターム第4週終了時までに全学生の学習状況を分析し、再クラスと特別クラスの時間割上の配置などを決定する。また、再クラスについては、参加が必要な学生一人ひとりの学習状況に対応した指導助言ができるよう資料を準備する。

このように、複数の教員を配置し多クラス展開する科目の場合、科目で指導内容を統一しておくことで、発展学習・補充学習の時間を同時間帯に設定でき、協力指導体制がとれるというメリットもある。

学生はそのタームの第1週から第4週の学習状況に応じて、月・水・木・金の各曜日、1,2時限に各科目の再クラス、特別クラスに必要回参加する。

3.4.4 授業日

授業日単位での活動として、必修4科目では、毎授業日の授業前後に、当日の全担当教員が1つの部屋に集まり、ショートFDを実施している。

授業前のモーニングFD（8:45～9:00）では、あらかじめ配布されている授業計画書・指示書に基づき、その日の授業目標・計画を4科目全体で共有するとともに、科目別に、前週、前日までの授業実践を踏まえて当日の授業を円滑に行うためのミーティングを行う。

授業後のランチFD（12:30～13:00）では、当日の授業実践を通して、お互いの工夫や授業内で発生した課題などを話し合う。その中で、個々の教員が他の教員の良いところを取り入れ、自分の授業を見

直す機会が生まれるようにする。また、そこで話し合われた内容を次の授業日に反映させるほか、コーディネーターは次回の授業計画書・指示書に改善策を盛り込む。

このように、必修4科目では、授業日前後に行われるショートFDを中核として、持続的な授業評価・授業改善を全教員の協力のもとで実行している。日々の授業が教育活動の中核であるという意味において、このショートFDの意義は大きい。

4. まとめ

本稿で報告を行った本学初年次必修科目の授業評価・授業改善にかかわる諸活動は、同一科目を担当する複数の教員団による日常的なFDのあり方について、具体例を示すものである。

全学生が履修する必修科目を多クラス展開する場合、複数の教員が担当することになる。目標と評価の共有化をはかり、科目全体の達成度を上げるためには、教員個人のレベルではなく、担当教員全員が組織的に関与できるFDを目指す必要がある。特に、多クラス展開する科目では、非常勤教員の協力は欠かすことができないので、専任教員と非常勤教員がともに関与し、ともにメリットが享受されるFDであることが望ましい。

また、教育改善に埋め込まれたFD活動は日常に行われる場合に実効性を持つ。日々繰り返すことによって、より目標を達成できる授業へと工夫を重ねることができる。

本学の初年次必修4科目における実践は、活動主体のみならず、活動内容に関しても、単独・個別に行われているものではなく、一定の共通性のもとで展開されているものである。また、重層的な取り組みが相互補完的に機能し、FDとしての実効性が高まっていると言える。

今後の課題としては、同一科目の担当教員団レベルに限らず、同一・近接領域の教員同士など、さまざまな教員組織レベルにおいて、持続可能な日常的

FDを作り上げていくことが求められる。

謝辞

本稿で報告した本学初年次必修科目の取り組みは、多くの先生、職員、スタッフの方々に支えられたものであり、筆者自身も幾重にも支えていただいた。全ての方々に改めて心より感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 松下佳代 課題研究「FDのダイナミックス」の方法と展望 (シンポジウム FDのダイナミックス—現状の把握と課題の析出). 大学教育学会誌 29(1), pp. 76-80. (2007).
- (2) 文部科学省. 大学設置基準等の一部を改正する省令等の施行について (通知), 19文科高第281号, 平成19年7月31日
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/07091103.htm

SUMMARY

In this paper, educational improvement activities in the compulsory subjects for the first year students at Otemae University are overviewed from the view point of FD (Faculty Development). The activities contain setting clear educational objectives and unifying teaching plans and evaluation criterions. It is discussed that focusing on the daily activities for educational improvement is important for the sustainability of FD.

KEYWORDS: EDUCATIONAL OBJECTIVE AND EVALUATION, EDUCATIONAL IMPROVEMENT, UNIFORMITY/COMMONALITY, DAILY FD ACTIVITIES